



安易な入れ墨は後悔の元 除去は高額、体に負担

腕や脚などにファッション感覚で「入れ墨（タトゥー）」を彫る若者が増えている。だが、軽い気持ちで入れてしまったために、後で「やめておけばよかった」「何とかして消したい」と思い悩む人も多い。入れ墨の除去には、レーザー光を照射して色素を壊す方法や皮膚の切除が有効だが、高額な費用や長い治療期間、体への大きな負担を覚悟しなければならない。安易な入れ墨はやめるべきだ。

▼増え続ける患者▲

「入れ墨の除去で受診した患者は最近5年間だけでも100人超。右肩上がりで増え続けている」。東京・世田谷の形成外科、榎原クリニックの榎原維聡院長は顔を曇らせる。

母親に付き添われて来院した女子高校生。上腕部にぐるっと一周、幅約2センチの群青色の幾何学模様が彫られていた。母親は「まさか娘が入れ墨なんて」と半分泣き顔。幸い3回のレーザー治療できれいに消せた。

思い詰めた表情の30代女性会社員の左肩には青、赤、緑で縦20センチ、横7センチほどの鳥の図案。「二日も早く入れ墨と決別したい」と切除を希望した。色素の入った皮膚の一部を切り取って縫合する手術を3回繰り返して、図案を完全に取り除いた。

若い世代ばかりではない。60代の元とび職の男性は、両肩から両胸にかけて青い筋彫り（輪郭のみ）が入っていた。「孫と一緒にプールや温泉に行きたい」と除去を思い立った。範囲が広いためレーザー治療は6、7回に及んだが、ちょっと見では分からないくらいになった。

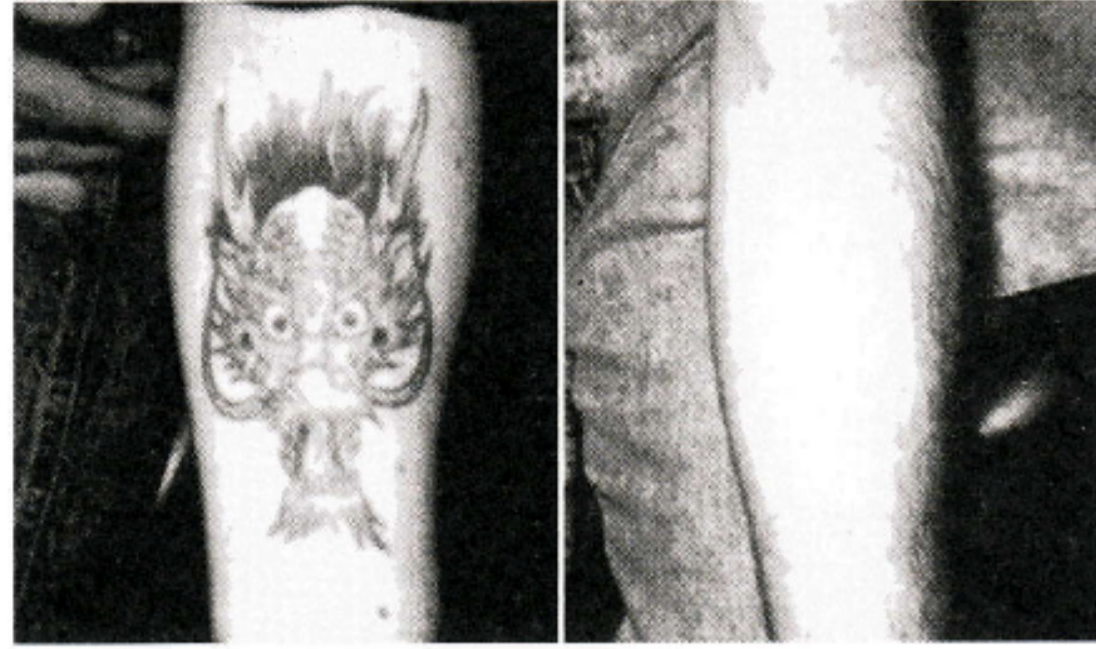
「年配者では背中一面の本格的な入れ墨もあるが、若い人は腕や肩、足首、太もも、腰などのワンポイントが多い。海外旅行で気軽に入れてしまうケースもある」と榎原院長。しかし、社会の目は結構厳しい。銭湯やサウナ、プール、スポーツジムなどで入場を断られたり、就職や結婚の障害になったりして後悔する人が多いという。

皮膚は表皮と、その下の真皮から成る。入れ墨は針を刺して真皮の深い所まで色素を入れ

る。表皮の細胞が「ターンオーバー」と呼ばれる新陳代謝によって周期的に生まれ変わるのに対し、真皮にはこうした仕組みが無いので、入れ墨の色素は皮膚の中にとどまり続ける。

▼感染の危険も▲

これを消す最新の治療法がレーザーだ。高いエネルギーを持つ光を直径数ミリの円い点にし



レーザーによる腕の入れ墨の除去前（左）と除去後（右）＝キャンデラ提供

て、麻酔をかけた皮膚に照射していく。真皮の中まで達した光のエネルギーは、色素に吸収されると熱に変わって色素の粒子を破壊。すると「貪食細胞」という白血球の一種が集まってきて、色素の破片を異物として自身の内部に取り込み、分解してくれるため色が消える。

ただし、レーザーも決して万能ではない。光に対する反応は色によって異なるため、黒や青などは消しやすいが、黄色や白は消しにくい。プロの彫り師が手彫りで皮膚の極めて奥深くに色素を入れた場合には、除去が難しいこともある。また、一回の治療ごとに数カ月の間隔を置かねばならず、治療をすべて終えるまでには長い時間がかかる。健康保険が使えず治療費は全額自己負担。料金体系は施設によって異なり、予想外の超高

キーボード

レーザーと医療

レーザーは①単一の波長②直進性が強く広がらずに速くまで届く③非常に高いエネルギーなどの特徴を持つ人工的な光。波長や性質の異なるさまざまな光をつくり出せるため、医療分野でも目的に応じて多種多様なレーザーが開発されてきた。

例えば手術の際に使われるレーザーメスは、水分を含むものに吸収されると熱を発生するという炭酸ガスレーザーの特徴を利用している。切った組織の断面や血液を瞬間的に凝固させるため、出血を最小限に抑えながら手術できるようになった。

また、光は波長によって吸収されやすい色があることを利用して、周囲の組織を傷付けずに、特定の色素を持つ組織だけを破壊できるレーザーも開発された。シミやアザなどの治療に利用されている。

入れ墨治療では、波長が長い光ほど皮膚の奥深くに到達するため、色素の深さや状態によって波長の異なる複数のレーザーが使い分けられている。一方で、光が吸収されにくい色素もあり、入れ墨を完全に除去できないケースがある。

額を請求されることもある。最近はいれ墨とほぼ同じ方法で、まゆやアイラインを描く「アートメイク」も女性に広がっている。普及に伴い「形が気に入らない」などのトラブルも増加している。入れ墨に比べてアートメイクの色素は皮膚のごく浅い所にあるため、通常はレ

ザー治療が容易だが、形を修正しようとした後から白や肌色の色

素が入れられた場合は厄介だ。レーザーに反応せず、かえって除去が難しくなるという。

「入れ墨の除去は入れるよりずっと大変だ。しかし、最も考えるべきなのは、入れ墨を彫る針の使い回しなどにより肝炎やエイズに感染する危険があること。まずは入れないことが重要だ」と榎原院長は警告している。（共同通信編集委員 赤坂達也）